

# 北国だより

白鳥美智子

上野発の列車が東北線、郡山駅付近を通り過ぎるころ、進行方向右側の車窓遠くの山なみの奥に、ひととき優雅な山がみえます。その山容から、この地方ではひろく「田村富士」と呼ばれる、なで肩の美しいこの山は、片曾根山といい、私どもの町のほぼ中央にあって、町の象徴的な存在でもあります。

「田村」は郡の名でありその起源は遠く坂上田村麻呂にさかのぼるということです。藩政時代になって私どもの町―船引

町（旧片曾根村）―をふくむ田村郡は、三春藩領となり、藩都はそれに先だつ古い時代から「小さな城下町」だった隣町の三春が、ひきつづき受け継ぎました。

三春という名の起こりがいつごろかはさだかではありませんが、その意味は「三つの春」で、春をあらわす三つの花―うめ・もも・さくら―がこの地方では同時に、いつせいは咲くところに由来しているといわれています。

きびしい寒さに耐えて、暗灰色の表情

をみせていた野や山に、三月も半ばを過ぎてから微妙な変化が現れはじめ、日ごと薄紅色や薄緑色が濃さを増して頂点に達する四月中、下旬ごろ、平地に、田村富士に、そして女王の足もとにひざまづいているような阿武隈の山々のいたるところに、春の花々がいつせいに開くのです。

それは、開演の時が満ちて、いまや充分に待った観客の前のどんちようが重々しく上がり、舞台に居並ぶ名優達のあで

やかな姿に一瞬かたずをのむ、あの光景にも似ています。北国の自然の、回り舞台のフィナーレが秋の風物とすれば、春のそれには、幕あけの華やかさと欲びと期待とがあふれています。

平地では三春町の、樹齡千年をこえ、根回り一メートル余の紅枝垂“瀧桜”を筆頭に多種の花が妍を競っているのに、山では、山桜を初め、山つつじ・こぶし・山吹など、中に太古から細々と生きつづけ、春のごく短い間だけ、人眼につかない山ひだにひっそりと咲いては、再び翌春まで茂みの中に身を隠す、もはやその名さえ記憶されることのない花々が、つつましくやかに懸命に咲く姿にはいしれない感動をおぼえます。

山の花々の中でまっ先に散るのは山桜でしょうか。青葉、若葉のイニシアティブをとるのも山桜のようです。花びらを

落としきらないうちに、もう葉を出し始める気の早さです。すると、誘われたように木々は緑の装いを競い合い、六月にはもうすっかり新緑で身を包んでしまします。

裏磐梯や安達太良、吾妻連峰などの深い山の中のカラマツの分厚い原生林が、澄明な大気の中で新緑の黄緑色からしだいに深緑へと変っていくありさまは、息をのむようなすばらしさです。

北国の春は気ぜわしいのです。そして盛りだくさんなのです。冬という舞台の暗転にあまりに長く足止めされ、じりじりしながら出番を待ちこがれていたせいなのでしょう。幕が開くと、惜し気もなく最高の見せ場を次々と披露してくれるのです。ですから北国の春は盛りだくさんなのです。

山では草木だけでなく、鳥や動物たち

もとても多忙です。いろいろな鳥たちの声で、山はオーケストラのリハーサルの時のようなにぎやかさです。なにしろ今のうちに巣をつくり、卵をかえしてひなを育てなければならぬのですから、彼らの身になってみれば、とても悠長にないどかまえていられないのです。

真冬の寒穴ごもりの中でお産をした母熊は、山に食物が豊富なので、人眼につかない山奥深くで子熊を連れ歩きながら、あれこれ教え育てていることでしょう。そして、山の麓では、幼稚園の先生が入園間もない子どもたちを連れて、花と新緑の山野を歩きまわっているのです。

(福島・わかさ幼稚園)

